

マクルーハン理論再考

——メディアの総合的理解に向けて——

飯塚浩一

1. 人間の知識とメディアの役割

我々が身の回りの環境を知覚し、それを知識として蓄える場合、大きく分けて二つの方法があると言えよう。一つは、我々が五感を通じて直接環境を知覚し、それを知識として体系化し蓄積する方法、もう一つは、書き言葉、話し言葉及び映像などの〈シンボル〉を通して、既にある程度体系化されている知識を取り入れる方法である。このように考えてみると、メディアがこれまで人類の知識の形成（情報の収集と体系化）及び伝達に果たしてきた役割は最大級のものであったと言えよう。

データを収集して体系化するという作業、すなわち知識の形成及び蓄積が、程度の差こそあれ我々が日常的に行っていることであるとするならば、メディアはその作業を組織的に行っていることになる。そして組織的な知識形成及び伝達を行う場合、その過程には技術的・社会的・政治的・経済的制約が課されることになる。すなわち、技術の進歩、リテラシーの向上、表現の自由、経済的繁栄等によって知識の形成のされ方が制約を受ける、ということである。

知識の形成・伝達を担う組織に対しては、確かに個々のメディア組織ごとに程度の差はあるものの、共通の歴史的・社会的制約が課されていると考える方が自然である。そしてその歴史的・社会的制約は、我々の日常的な知識形成過程にも当然課されているはずである。よって、メディアに課されている歴史的・社会的制約を探ることは、すなわち我々自身の知識体系に対して課されている制約を明らかにする作業であるとも言える。

我々の知識に対して課されている歴史的・社会的制約を解明する作業は、これまで例えばカール・マンハイムらに代表される知識社会学者たちによって担われてきた。しかしながら、今日の先進国社会、例えば米国や日本のように、技術の進歩、リテラシーの普及、表現の自由、経済的豊かさ等が基本的に達成され、しかも現在、工業化の段階を経て情報化の段階に入ったと言われている社会において、こうした歴史的・社会的制約を目に見える形で描き出す作業はどのように行っていくべきであろうか？

今日、先進国社会においてメディアが果たしている社会的役割を知る、あるいは人々の「知

識」の形成にどのような役割を果たしているのかを知ることは、その社会で生活する人々の目に世界がどのように映り、またどのようにあるべきものとして考えられているかを知る上で重要である。こうした課題に対して、アメリカを中心として発展したメディア研究は多くの貢献を行ってきた。しかしながら、1959年にバーナード・ベレルソンが「コミュニケーション研究の現状」という論文の中で指摘した限界は、いまだに越えられていないように思われる¹⁾。例えば、リチャード・W・ブッドとブレント・D・ルーベンがメディア研究の現状に対して次のように述べている。

これらすべての活動の中に潜むミステリーは、約四〇年間に渡って調査や著作が積み重ねられ、〔その内容の〕正確さが増してきたにもかかわらず、マス・コミュニケーションの過程と効果について我々が知っていることは、ハロルド・ラスウェルが〈情報源—メッセージ—チャンネル—受け手〉という基本的なモデルを提示した時に既に分かっていたことなのである。実際、五十五年以上前にウォルター・リップマンの『世論』（研究のための仮説としては未だに十分に利用されていない）が示したことが、おそらく現在のところ最も包括的かつ統合されたマス・コミュニケーションについての理解であろう。マス・コミュニケーションの調査・研究における過去の歴史は、実質的には、現在と同じ状態だったのである（特に異なる点と言えば、おそらく、調査方法が洗練され複雑になってきたということである）²⁾。

ここに述べられていることは、既に多くの研究者によって指摘されているように、アメリカ流の行動科学的アプローチが持つ方法論上の限界でもあろう。すなわち、研究結果の普遍妥当性の根拠が、上述のラスウェルのモデルに象徴される方法論の価値中立性と、研究対象を中立的なものとして想定する事に求められているからである。具体的に言えば「マス・メディアは中立的な存在であって、本質的には善でも悪でもない」とする考え方である。しかしながら、ここでよく考えてみなければならない事は、人間と、人間を取り巻く環境との関わりである。人間は環境に対して働きかけ、それを変えていくと同時に、環境からの働きかけを受けて自らも変わっていく。それは単に土地や動植物といった自然環境のみならず、人間と社会の間にも存在している関係である。人間は社会を作ると同時に、社会から作られるのである。従って、メディアについても、人間がそれをどう扱うかに関わらず、様々なメディアの存在自体が人間に影響を与え得ると考えられよう。

更にここで注意すべき事は、メディアの影響を研究する場合、方法論上の限定から、メディアと呼ばれるものの対象を、新聞、ラジオ、テレビといった「情報伝達」を目的としたものだけに限らざるを得ない、という事である。すなわち、人間を取り巻く「環境」という側面から考えた場合、ラジオ、テレビ等は確かに重要な要素であるが、それらは現代の科学技術が作りあげた「技術的環境」の一部に過ぎない、という認識が薄れてしまいがちなのである。例えば、フランスの社会学者ジョルジュ・フリードマンは、工業機械化、つまり技術は人間が当初考えたような中立的なものではなく、自然を変え、人間に働きかけ、社会を根本的に変えるも

のであるとの観点に立ち、技術文明が人間の精神に与えるインパクトについて次のように言及している。

技術は、全体として、人間の生存条件を変化させてきたし、今でも毎日のように変化させている。人間の生活は刻々と、いやましに深く技術の浸透を受けているのであって、この広範な現象は、労働、家庭、街頭、余暇といった生活の新しい分野に到達し、絶え間なくますます奥深く入り込むにいたっている。人間は、かつては知られていなかった無数の誘惑、興奮、刺激にさらされているのである。したがって、これら技術の総体は、自らの周囲に、全体としていえば、〈技術的環境〉とでも呼んでしかるべきものを作り出し定着させ、日増しに濃密の度を加えつつあるのである³⁾。

技術的環境と人間の精神という観点から、メディアと人間との関わりについての考察を試みた研究の代表的なものが、フランクフルト学派のメンバー（M. ホルクハイマー、T. W. アドルノ、L. ローウェンタールほか）によって為された、1940年代から50年代におけるアメリカのマス・カルチャーの分析であった⁴⁾。彼らは「経験主義的伝統によって想定されたインパクトについての問題——説得的効果の問題——を、より広い知覚の問題、特に文化的価値の問題に従属させた」のである⁵⁾。彼らのアプローチは、従来のマルクス主義者のアプローチからすれば、文化形態＝上部構造に着目したという点で画期的であったし、また行動科学的研究に対しても、その持つ方法論的な問題点を明らかにし、総合的なパースペクティブを提出しようとした点で評価され得る。しかし、結果的には、彼らのメディア研究は具体的な研究への発展性に乏しく、特にその代表作である「文化産業論」（アドルノ&ホルクハイマー）は、1977年になってやっと英語に翻訳されたほどで、アメリカの実証的研究との生産的統合にはほど遠い状況であった⁶⁾。ドイツの批評家H. M. エンツェンスベルガーに言わせれば「ホルクハイマーとアドルノの著作もまた、古き、ブルジョアのメディアに浸み込んだ郷愁を免れることができない」だったのである⁷⁾。

そこで、筆者はここで、1960年代にメディア研究の領域に彗星のごとく現われ、ブームを巻き起こしながらも、その理論的貢献をほとんど認められることなく消え去った、カナダの文明論者かつ英文学者マーシャル・マクルーハンの残した仕事を、知識社会学的な立場からメディアの総合的理解を行うための鍵として再評価する事にした⁸⁾。マクルーハンは、エンツェンスベルガーをはじめとする幾人かの批評家からは、非常に楽天的・大勢順応的だとして批判の対象にされたが⁹⁾、筆者は、マクルーハンの時代精神に対する問題意識に注目しつつ、彼の思想的背景及び理論的立場についての整理を試みることにしたい¹⁰⁾。

2. マクルーハンの二つの顔

(1) 文明論者としてのマクルーハン

マクルーハンには二つの顔がある。一つは、メディアを科学的に研究する社会学者として

の顔であり、もう一つは、「文明論者」「文明史家」「未来論者」といった、主として産業界向けの顔である。このうち、社会学者としての顔は、日本ではほとんど知られていない¹¹⁾。またアメリカでも、実証主義的研究が隆盛していた折、ほとんど顧みられることがなかったように思われる¹²⁾。むしろ、1960年代に起こった「マクルーハン・ブーム」のように、産業界においてもはやされ、研究者のうちでも、主に「文明論者」としてのマクルーハンに目を向けたのみで、彼の文明論の裏に展開されている問題意識・理論的立場にはほとんど注意が払われることなく、ブームは去り、また彼自身も1980年の初めに死去してしまったのである¹³⁾。

では何故、彼の「社会学者」としての顔が着目・検討されなかったのであろうか。先にも述べたように、日本では「文明史家」としてマクルーハンを捉える見方が主であった。「文明史家」として捉えると言ったが、この場合は特に、歴史を発展段階説という理論構成で捉える見方である。デイビッド・リースマンが社会心理の側面に注目して歴史を三つの区分に分けたように¹⁴⁾、マクルーハンがコミュニケーション史の区分から「グーテンベルグ以前の、口承段階を「部族的」コミュニケーションと呼び、それにつづく第二期を「活字の時代」、そして、放送を中心とした電子的コミュニケーションの時代である現代を「触角的」コミュニケーションと名づけた¹⁵⁾のである。しかし、マクルーハンが一体どのような意図からこのような時代区分をしたのか、ということはあまり問題とされていない。すなわち「文明史家」としてマクルーハンを捉えた場合、彼はただコミュニケーション形式の変化を描いただけということになり、そのような変化を描いた理由にはほとんど注意が向けられなくなってしまったのである。この点について例を挙げて少し検討してみよう。

文明史における価値志向の変化を段階的に表すものには、現代を工業化社会から情報化社会への変化として描くものが多い。つまり、物財としての「モノ」よりも、形を持たない「情報」の方に比重が置かれる社会、ということである。加藤秀俊は、これを一着のドレスの価値を決める要因の変化として示している。工業化社会の価値尺度においては、「物質的価値」——木綿であるか、羊毛であるか、合成繊維であるか、あるいはそれらの繊維の品質がどう格付けされているか——が重んじられる（物質の消費）のであるが、情報化社会においては、「情報的価値」——見た目に美しい、といった感覚的・神経的満足——に比重がかかる（情報の消費）のである¹⁶⁾。しかしながら、たとえ「物財の消費」であっても、実際は、その物財的価値を「知覚」する訳であるから、結局は「情報」を消費することになる。つまり、たとえ「モノ」を買ったとしても、人間の体に入る時は「情報」の形で入るのである。よって、ここで重要なのは、物質的・感覚的といった価値観を人間に当てはめるような「技術的環境」なのである。「情報化社会」を論ずる際には、人間はより「情報的なもの」を選ぶ、ということが前提とされているが、マクルーハンはそのような人間の価値観を作り上げる、あるいは枠組みをはめる原因を科学技術が作る技術的環境に求めたのである。すなわち彼によれば、人間が「モノ」あるいは「情報」を知覚する様式が、「視覚的」であるか「聴覚的」であるか、といったことを規定するような、人間を取り巻く科学技術のメカニズムこそが重要なのだ、ということになる。彼は、こうした科学技術と人間の物の見方の間の関係について、次のような観点を持っていた。

我々は長い間、人間の信念がその人の存在を形造り、また色合いをつけるのだ、という考えに慣れ親しんできた。その信念は窓を与える。その窓とは、すべての出来事を枠づけるのであり、またその窓を通して、人はすべての出来事を眺めるのである。……我々は、技術的環境の形態もまた、思考の窓 (idea-windows) なのである、という考えにはあまり慣れていない。人間の作為的な知性によって計画され、実現されたすべての形態——手品の仕掛けから大都市まで——、すべての状況は、現実を示し、あるいはゆがめる一つの窓なのである¹⁷⁾。

すなわちマクルーハンは、人間は、環境を知覚しまたそれに働きかけるために自ら作り出した技術によって、逆に自分の知覚能力を枠づけられる、という見方をするのである。

(2) 思想家としてのマクルーハン

思想史的な観点からマクルーハンの問題意識を考えた場合、1920年代及び30年代に活躍した思想家たち (E. トレルチ, M. ウェーバー, F. マイネッケ, M. シェーラー, K. マンハイムら) との共通点を見出すことができよう。彼らは、第一次世界大戦後に訪れた新しい文化状況と、伝統的な価値とを何とか「均衡」させようと死力を尽くした¹⁸⁾。彼らとマクルーハンとの決定的な違いは、1920年代の思想家が、伝統的文化意識の側に立った上で、新しい文化状況を「危機」と感じ、それとの「均衡」を図ったのに対し、マクルーハンの場合は、1920年代以降の「大衆文化状況」の側に立った上で、人間の内部になお残る「伝統的価値意識」(マクルーハンは、これを「活字文化」に基づく「近代科学的思考」として描いている) との「均衡」を図っている点である。両者とも「伝統的価値」と「大衆文化」との「葛藤と均衡」というテーマに関しては共通であり、マクルーハンの問題意識を考えるには、まずこのテーマについて少し整理しておく必要がある。

1920年代及び30年代を代表する思想家の一人、カール・マンハイムは、『変革期における人間と社会』の序文で、彼の問題意識、すなわち「葛藤と均衡」のテーマをめぐる考察について次のように述べている。

今日われわれが経験している重要な諸変化の全体は、われわれがそれを古い社会形態の解体として、そして新しい社会形態の建設過程として把握するときのみ、正しく理解しうるのである。しかし、社会的変化はけっして、根本的に新しく建設するといった性質のものではない。……社会的変化はつねに、改造の過程において古いものと新しいものとを統一するのである。したがって、古い要素が解体して新しい要素の変化することによって生ずる事件や構造を観察することは、根本的に新しく建設されたものを適切に把握することと同様に重要である¹⁹⁾。

その上で、「現代の政治や経済を特色づけている同一の緊張が、文化や社会的な人間形成の領域にも存在しており、同様に破壊的な作用を及ぼしている」²⁰⁾という前提に立って、「精神的

生活における機能分化の歴史的形成過程²¹⁾を探究しようとしているのである。彼は「現代社会における合理的要素と非合理的要素」の中で、技術と、人間の持つ道徳的な力の不均衡を指摘して次のように問うている。

確かに、技術的・自然的知識に関しては、馬車の発明以来人間は驚嘆すべき成果を達成してきた。しかし……他の分野における人間の見識は今日、手押し車の時代とは非常に異なっているのであろうか。

われわれの動機や衝動はほんとうに、われわれの祖先のそれとは別の、あるいはもっと高い次元で作用しているのであろうか²²⁾。

そしてその答として、本来人間の夢をかなえる物として製作された飛行機が爆弾を落とすために使われるという例を挙げて、「人間は技術的な発明家の才能が生み出した最新の成果をも大昔の原始的な衝動や動機を満足させるために占有しうる」と断言し、その理由として「社会を秩序づけ、統制するための道徳的な力と人間の知識の発展よりも、技術的な自然支配の発展のほうが数マイルも先に進んでいる」と指摘している。すなわち「人間の諸能力の不均衡発展」こそが技術と人間のジレンマを生む原因なのであり、「人間と自己に対する合理的支配が技術的発展と歩調を保たないならば、われわれの現在の社会秩序は崩壊せざるをえない」と主張したのである²³⁾。

マンハイムが社会的・精神的領域全般にわたっての総合的考察を試みているのに対し、マクルーハン「コミュニケーション技術の力と、個人の主体的な反応力との間の均衡」という側面に注目し、科学技術によって拡張された、我々人間自身の輪郭を考察・理解するための原理を探ろうとしている。彼は自分の問題意識を次のような形で表現している。

我々が今日守らなければならないのは、ある特定の文化の中で発展してきた価値でもなければ、あるコミュニケーションの様式によって発展させられた価値でもない。現代の科学技術は、人間及び人間を取り巻く環境の全体的変化を試みることを前提としている。このことは、次に、全ての人間の持つ価値の綿密な調査、及び保護を要求する。そして、人間の出来ることにのみ限って言えば、この保護の拠点は、人間の認識の中に含まれている創造的過程の本質を、分析的に知覚する、ということに置かれなければならない。というのは、科学と技術が新しいメディアの操作の中で自らを確立させてきたのは、この拠点の中においてであるからである²⁴⁾。

マクルーハンは、「技術」を人間の感覚器官の延長と考え、技術の持つ「人間の相互関係と行動の尺度や形態をつくり出し制御したりする」側面を「メディア」と捉えている²⁵⁾。そして、マンハイムの追求した、技術の発達と人間の持つ道徳的な力の均衡は、「人間の諸機能の拡張形態間の相互作用の適正な比率²⁶⁾」の要求として表明されている。すなわち彼は、「現代の

さまざまなテクノロジーは、相互作用と相互依存という、この有機的機能にとっては決して一概に好ましいとは言えない²⁷⁾という前提に立ち、諸技術間の合理的共存、つまり人間の知覚能力の均衡的發展を可能にするような、相互作用の適正な比率を追求しているのである。

こうしてみると、マクルーハンはメディアの作る「技術的環境」と人間の精神生活に関する理論的かつ包括的研究を行ったと言ってよかろう。そこで次に、マクルーハンの研究を特徴づけている理論的立場について考察を加えることにしたい。

3. 「メディアはメッセージ」——マクルーハンのメディア理論

マクルーハンの理論的立場は、彼の有名なフレーズ「メディアはメッセージである」に集約されていると言える。しかし、このフレーズの持つ本来の意味が十分に理解されているとは言い難い。一般に「メディアはメッセージ」というフレーズを引用する場合、メディア研究における従来の内容分析重視に対して、「チャンネル」=媒体の重要性を説いた例として取り上げられることが多い。つまり、基本的にはあくまでもラスウェル図式の内部での選択の問題として取り扱われているのであり、「内容（メッセージ）」か「媒体（メディア）」かというように、それぞれ別個のものと考えられているのである。筆者はこのフレーズに込められている意味を三つに整理してみた。

第一の意味は、従来のメディア研究の考え方に対する批判である。彼は、「四世紀にわたる書籍文化は、本及び新しいメディアの内容に対して焦点を合わせるように我々に催眠術をかけることによって、コミュニケーションのためのすべてのメディアにおける、まさにその形式こそが、そのメディアの運ぶすべてのものと同じ位重要なんだ、ということをつからなくしてきたのであろうか？」²⁸⁾という問いを発しつつ、メディアと内容を切り離すことによって、伝統的な効果研究の枠外での研究を提唱しているのである。彼は、メディアの重要性を示す例として鉄道を挙げている。「鉄道という媒体が運ぶものとか内容が何であろうとまったく関係はない」のであって、「鉄道は、走ること、輸送すること、あるいは車輪、線路を人間社会に持ち込んできたのではなく、まったく新しい種類の都市や仕事やレジャーを生み出して、従来の人間の機能を促進し、また規模を拡大してきたのである。」²⁹⁾また、ハリー・ピアソンの『初期帝国における交易と市場』を引用し、貨幣の使用ということよりも、貨幣の使用によって起こる社会構造の変化が今日強調されねばならないことを挙げている³⁰⁾。これらの例から、彼は「メディアの内容あるいは用い方はさまざまだが、それらは人間関係の型をつくり出すことはできない。むしろ、メディアの「内容」は、われわれがそのメディアの本性を知るうえにかえって妨げになることの方が多い」³¹⁾とし、メディア形式への注目を主張しているのである。

第二の意味は、「すべてのメディアの「内容」はつねにもう一つのメディアである」³²⁾ということである。つまり、「書く場合の内容はスピーチであり、印刷物の内容は書かれたことばであり、印刷されたものが電信の内容となる」³³⁾のである。彼が問題としているのは、メディアが何を伝えているかではなく、あるメディアが「既存の過程の振幅を増したり、速度を速めたりするそのやり方、あるいはその表われ方が、心理的、社会的にどんな影響を与えるか」³⁴⁾と

ということなのである。この点を見落とすことによって、日本でのマクルーハンの理解は、違った文脈の上でなされることになってしまったように思われる。「メディアはメッセージ」を取り上げる場合、主としてW. リップマンやD. J. ブーアスティンらのアイデアである「疑似環境論」を展開させたもの、という形で捉えられることが多い³⁵⁾。疑似環境論の文脈で考えた場合、直接的コミュニケーション、すなわちフェイス・トゥ・フェイスのパーソナル・コミュニケーションがコミュニケーションの基準として考えられ、道具・機械を媒介としたコミュニケーションを間接的コミュニケーションとして分けて考えてるのが普通である。しかしながら、マクルーハンの場合、すべてのコミュニケーションの内容は別のメディアなのであって、直接・間接と分けるのではなく、連続的に考えているのである。この考え方を良く示しているのが、彼の言語についての考え方である。

人間がつくったものとしての言語、人間の技術及び欲求の集合的産物としての言語は、容易に“マス・メディア”とみなすことが出来るのであるが、これら言語に由来する、より新しいメディアを新しい“言語”と考えることに対しては、多くの人は困難を覚えるのである。書くことは、そのいくつかの形式において、技術的には新しい言語が発達した物としてみなされ得る。なぜなら、発音に則した道具を用いて聴覚的な物を視覚的な物に翻訳することは、思考や言語や社会のすべての側面の形を新しくするような、ダイナミックなプロセスの端緒を開くことだからである³⁶⁾。

もし多くの人々によって考案され使用されている言語が、マス・メディアであるならば、我々の新しいメディアはどれもある意味で一つの新しい言語である。すなわち、新しい労働慣習と包括的な集団的認識に依ってつくり上げられた新しい経験のコード化なのである³⁷⁾。

すなわち、「言語」も一つのマス・メディアであると考え、「書くこと」や「活字」などは、「既存の過程の振幅を増したり、速度を速めたり」³⁸⁾したものとして考えていくのである。

このようにして、あらゆるメディアの発達を連続的に捉えることにより³⁹⁾、マンハイムの言う「古い原理と新しい原理との併存によって生じる混乱」⁴⁰⁾を把握・分析し、現代の諸科学技術の間の合理的共存を可能にする相互作用と、適正な比率を追求していこうとするのがマクルーハンの狙いなのである。

最後の第三の意味は、「すべてのメディアはわれわれ自身の拡張なのだ」⁴¹⁾というものである。これは、マクルーハンの理論的立場の根幹、つまり技術哲学の根幹をなす考え方である。こうした観点からコミュニケーションについて考えようとした先駆者の一人に、C. H. クーリーがいる。彼の考え方は、そのままマクルーハンの考え方に連なるといってよいため、やや長いですが次に引用しておくことにしたい。

コミュニケーションという言葉によってここで意味されるのは、人間関係が存在し、発

展するためのメカニズムのことである——すなわち、精神についてのすべてのシンボルであり、それには、精神のシンボルを空間的に運び、時間を越えて普及させる手段が伴っているのである。それ（コミュニケーション）には顔の表情、態度、振る舞い、声の調子、言葉、書くこと、印刷、鉄道、電報、電話、そして空間と時を克服するということに関して最近達成されたものなら何でも含まれるのである。これら同時に起こったことすべては、それらの結びつきの複雑さという点で、人間の思考の有機的全体性に匹敵するようなものを作り上げている。そして、その点で、精神的成長の道筋におけるすべてのものは、一つの外部的存在なのである。我々がこのメカニズムをより綿密に考えれば考えるほど、人類の精神生活との関係の親密性がより一層明らかになるであろう。そしてこういった考察以上に、精神生活の理解に役立つものは他にないであろう⁴²⁾。

……もし我々がより広い視野を持ち、社会集団の生活を考察するならば、我々は、コミュニケーション——その組織には文学、芸術、制度が含まれる——はまさに、（人間の身体）の外側にある、目に見える思想構造であり、人間の内側の、精神的生活の効果と同じ位の影響力を持つことがわかるであろう。……シンボルや伝統、制度は、確かに精神のなかから客体化されていく。しかし、それらが客体化されたまさにその瞬間、そしてその後、それらは精神に作用を及ぼし、そしてある意味ではある思想を刺激し、発展させ、固定しながら、精神をコントロールするのである⁴³⁾。

こうした考え方に基づき、マクルーハンは、「メディアの個人的並びに社会的影響は、われわれの一つ一つの拡張、言い換えれば新しい技術の一つ一つがわれわれに持ち込んでくる新しい尺度で計らなければならない」⁴⁴⁾と主張するのである。

マクルーハンは、メディアを、主体（行為する人間）とそれを取り巻く環境を媒介する「技術」と捉えている。技術の本質とは「新しい環境に対する新しい複合的行動様式の発明による適応」⁴⁵⁾である。もし、主体と環境が調和していればその調整は本能で足りる訳であるから、技術が存在するという事は、主体と環境の対立を媒介し、調和させるということである。よって、技術の存在には、本能とは異なる知性の存在が予想されねばならない。また、技術は媒介的なものである以上、常に「道具」の存在が前提となる。技術は、もともと「環境に適応するための行為の型」なのであるが、そこには常に道具が含まれる、ということになる。よって、道具は「知性の物質化もしくは客観化」⁴⁶⁾であると考えられる。そこで道具は知性によって発達することになるが、同時に、新しい道具を得ることによって、人間の行為の新しい型が生ずることになる。つまり、知性が道具によって発達することになるのである。マクルーハンは、人間と環境を媒介する技術、あるいはその客観化されたものとしての道具としてメディアを捉え、それによって生ずる人間の行為の新しい型について考察しようとしたのである。

こうした理論的立場に立つことは、従来のメディア研究の「主客二元論」的認識に対して批判的な立場を取ることを意味している。メディアを「知性の客観化されたもの」と考えることは、研究対象を「価値中立的なもの」として捉えることを否定し、メディアそれ自体が人間の

知性に及ばず影響を把握することを可能にするのである。マクルーハンは、ジェネラル・デイヴィッド・サーノフの「われわれは、ややもすれば技術が生み出した道具を非難して、それを使う人たちの罪を問おうとしない傾向がある。しかし現代科学が生み出したものそれ自体は、よいものでも悪いものでもない。その価値を決めるのは、それをどう使うかという使い方である」⁴⁷⁾という発言に対して、「すべてのメディアに対する紋切型の答えは、それがいかに使われるかだということだが、こういうのは、感覚が麻痺したテクノロジー痴呆の態度である」⁴⁸⁾と批判している。彼に言わせれば「技術の影響は意見あるいは概念の段階であらわれるのではなく、着実に、何らの抵抗なく、感覚の比率あるいは知覚の基準を変えて行くのである。」⁴⁹⁾

次に、上述のマクルーハンの理論的立場の構成に大きな影響を与えていると考えられる要因を三つ挙げておくことにしたい。

第一に指摘されるのは、H. A. イニスからの影響であろう。イニスはもともとカナダの経済史を研究していたが、シカゴ大学でソースタイン・ヴェブレンの影響を受けたことが、コミュニケーションの研究へ目を向けるきっかけとなった。イニスは1930年代の初め、物やサービスの相対的価値を決定するための制度的構造としての、価格システムに注意を向けるようになった。やがて彼は、価格システムの浸透的な力は、コミュニケーションが持つ浸透力の一側面にすぎないということに気付き、以後1940年までに、印刷、ジャーナリズム、広告、検閲、宣伝といった、新しい分野に踏み込んでいくのである。そして、彼のテーマは、紀元前4000年から20世紀中頃までのコミュニケーションの歴史を構築することに絞られていくことになる。その際、彼の依って立つ理論的立場で、マクルーハンにとって大きな刺激となったと思われるのが、コミュニケーション・システムを精神と意識の技術的拡張とする考え方である。彼は、コミュニケーション・メディアの機能と文明の盛衰を関係づけようとしたのである⁵⁰⁾。時代を確定するに際し、ヘーゲルが国民国家に、マルクスが生産様式に注目したのに対し、イニスはコミュニケーション・メディアを強調したのである。イニスとマクルーハンの違いを挙げれば、それはイニスがコミュニケーションと社会組織の間の関係に主に関心を払っていたのに対し、マクルーハンは、メディアが人間の感覚に与えるインパクトに注目していたことであった。

第二に、イニスからの影響に劣らず重要であると思われるのが、ケンブリッジ大学への留学(1934年～36年)である。彼はそこでI. A. リチャーズやF. R. リーヴィスらの影響を受けることになった。マクルーハンは、今日のメディア研究で使われている意味での「コミュニケーション」——ラスウェルの図式に当てはまる、という意味で——ではなく、コミュニケーションを行うための背景となる「文化」の研究こそがコミュニケーション研究の中心となるべきであると考えている。これは、イギリスにおける文芸批評、あるいは「文化研究」(cultural studies)に特徴的な考え方である⁵¹⁾。J. W. ケアリーによれば、「イギリスで文化研究と呼ばれるものは、また、コミュニケーション研究とも呼ばれ得るのである。なぜなら、我々がこのコンテキストにおいて研究していることは、経験が理解され、普及され、そして賞賛されるその道筋だからである」⁵²⁾ということになる。

第三に、E. T. ホールの次のような考え方が、マクルーハンの理論的立場にとって大きな意味を持っていると考えられる。ホールは「言語的言語以外に、われわれはたえず「沈黙のこ

とば], すなわち「行動の言語」を用いて、真の感情を伝えているのである」⁵³⁾という観点に立ち、この「沈黙のことば」すなわち「文化」⁵⁴⁾が人間の行動に与えている深い永続的な影響について考察すべきだとしている。加えて、このような「コミュニケーションとしての文化」⁵⁵⁾という考え方から、ホールは、様々な技術・道具を人間の器官の拡張として考えるという理論的立場を打ち出している。マクルーハンが引用している次のホールの文章は、マクルーハンが彼から受けた影響をよく示していると言えよう。

昔は体を使って人間が行っていた、ほとんどのことが、今日ではそのための「拡張活動」によって行われている。武器の進歩は歯とこぶしに始まり、原子爆弾に終る。衣服や住居は、人間の生物学的温度調節機構の拡張である。家具は、地面の上でうずくまったり、座ったりすることのかわりをする。動力工具、眼鏡、テレビジョン、電話、時間・空間を越えて声を運ぶ書物などは、物質的拡張の例である。貨幣は労働を拡張したり、貯えたりする方法である。われわれの輸送網は、かつてわれわれが足と背とで行っていたことの拡張としてとり扱うことが可能である⁵⁶⁾。

以上述べた、文芸批評やホールからの影響は、マクルーハンの分析手法に対して、大きな影響を及ぼしている。先に述べたように、マクルーハンは、メディアを人間器官の延長＝主体の一部として捉える以上、従来のメディア研究のように、観察結果を数字に置き換える手法はおのずと取ることができなくなる。よって彼の手法は、文化人類学者の記述法を、未開社会ではなく、現代社会に応用したものとなる。しかもその題材としては、文学作品、芸術作品、あるいは思想家の著作が数多く取り上げられている。G. フリードマンは、小説、絵画、映画などの「多様な作品のうちこそ、現在進行中の変化によって惹起された揺動——大部分の人びとにおいてはいまだ新しい均衡状態に達するにいたっていない——が芸術家のより微妙な神経組織によって記録され、増幅された形で見出すことができるのである。そこにこそ、心理学者と歴史家が考慮すべき多くの証言と資料が、まるでかれらのために特別にとっておかれたかのように存在しているのである」⁵⁷⁾と指摘しているが、マクルーハンも、「テクノロジーにしっかりと直面できるのは、五官の知覚を変化に応じさせることに習熟した真の芸術家だけである」⁵⁸⁾と主張して、多様な芸術作品を用いて、技術的環境の中での人間の精神生活の変化を描いているのである。

これまで見てきたことから分かるように、マクルーハンの理論的立場は決して彼独自のものというわけではない。むしろ、多くの思想家・理論家の業績を総合して、そこに彼独自の理論的立場を再構築し、それを具体的実証に応用したところに彼のメディア理論家としての価値がある。本稿では、彼の研究の思想的背景及び理論的立場を整理することにとどまり、彼の膨大な研究成果の分析には踏み込むには至らなかったが、今後、彼の理論的立場を彼自身の研究成果によって後づけしつつ、メディアの総合的理解へ向けた新たなアプローチ方法を構築していく必要があるだろう。

注

- 1) Bernard Berelson, 'The State of Communication Research', *Public Opinion Quarterly*, Spring, 1959. 中西尚道訳「コミュニケーション研究の現状」(『アメリカーナ』第6巻4号, 1960年). この論文の中でベレルソンは, コミュニケーション研究における主な研究方法——政治学的分析, 標本調査, 小集団におけるコミュニケーション過程の研究, 実験的方法——が既に利用し尽くされ, 創造性を失ってしまい, 幾つかの傍系的研究も, それほど発展を期待できないとしてその方法論的停滞を指摘している.
- 2) Richard W. Budd & Brent D. Ruben, *Beyond Media : New Approaches to Mass Communication*, Transaction Publishers, 1988, p.4.
- 3) ジョルジュ・フリードマン『技術と人間』天野恒雄訳, サイマル出版会, 1973年, 8頁.
- 4) 例えば, 次の文献を参照—— T.W. Adorno, 'On Popular Music', *Studies in Philosophy and Social Science* 9, No.1, 1941; Adorno, 'The Radio Symphony', in P.F. Lazarsfeld & F.N. Stanton (eds.), *Radio Research*, New York : Duell, Sloan and Pearce, 1941; M. Horkheimer, 'Art and Mass Culture', *Studies in Philosophy and Social Science* 9, No.1, 1941; Adorno and Horkheimer, 'The Culture Industry : Enlightenment as Mass Deception', in J. Curran, M. Gurevich and J. Woolacott (eds.), *Mass Communication and Society*, The Open University press, 1977. なお, フランクフルト学派によるメディア研究の紹介としては, 広井脩「『批判的コミュニケーション研究』ノート——アメリカ初期ラジオ研究の一側面——」(『東京大学新聞研究所紀要』第25号, 1977年), 広井「アメリカ初期プロパガンダ研究と亡命社会学者」(『新聞学評論』第27号, 1978年), 及び拙稿「マス・コミュニケーション研究の新たなパースペクティブに向けて——実証的研究に対する批判的アプローチの試み——」(『慶應義塾大学大学院法学研究科論文集』第22号, 1985年)を参照のこと. また, フランクフルト学派の活動一般については, マーチン・ジェイ『弁証法的想像力——フランクフルト学派と社会研究所の歴史 1920-1950』荒川幾男訳, みすず書房, 1975年, が詳しい.
- 5) Daniel J. Czitrom, *Media and the American Mind : from Morse to McLuhan*, University of North Carolina Press, 1982, p.142.
- 6) フランクフルト学派の理論的業績は, 実際に彼らが活動している間は表立った影響を及ぼす事はなかった. デイビッド・リースマンやドワイト・マクドナルドらの研究にその影響は見られるものの, 本格的に彼らの研究が顧みられるようになったのは「フランクフルト社会研究所」が1950年にドイツへ戻ってからと言えよう. 彼らの著作は, 大部分は1960年代まで英語に翻訳されないままであった. また, アメリカの実証的研究とフランクフルト学派の研究を生産的に結びつけようとしたP. F. ラザースフェルドは, アドルノをプリンストン大学のラジオ・プロジェクトに招請したが, 結果的には失敗に終わっている. 詳しくはD.Fleming & B.Bailyn (eds.), *The Intellectual Migration : Europe and America, 1930-1960*, Harvard University Press, 1969. 荒川幾男他訳『亡命の現代史4 知識人の大移動2 社会学者・心理学者』みすず書房, 1973年, に所収のP.F. Lazarsfeld, 'An Episode in the History of Social Research : a Memoir' 今防人訳「社会調査史におけるひとつのエピソード」及びT.W. Adorno, 'Scientific Experiences of a European Scholar in America' 山口節郎訳「アメリカにおけるヨーロッパ系学者の学問的経験」を参照のこと.
- 7) H. M. エンツェンスベルガー『メディア論のための積木箱』中野孝次・大久保健治訳, 河出書房新社, 1975年, 121頁.
- 8) マクルーハンの著作については, 近年になってメディア研究としての再評価をする動きが出てきている. 例えば, 次の文献を参照—— Marjorie Ferguson, 'Marshall McLuhan revisited : 1960s zeitgeist victim or pioneer postmodernist?', *Media, Culture and Society*, Vol.13, No.1, January 1991., 佐野山寛太『人間縮小の原理 メディアの新理解』洋泉社, 1988年, 及び吉見

- 俊哉「メディア変容と電子の文化」(『思想』第817号, 1992年7月)。また, Journal of CommunicationのVol.31, No.3, Summer 1981.では, “The Living McLuhan”と題する特集が組まれている。
- 9) エンツェンスベルガー, 前掲書, 及びジョナサン・ミラー『マクルーハン』猪俣浩訳, 新潮社, 1973年を参照のこと。
 - 10) マーシャル・マクルーハン (Marshall McLuhan) は, もともと正統的な英文学者だが, 一般的には文明論的な著作の方で知られるようになった。マクルーハンが一般向けに書いた文明論の最初の著作は『機械の花嫁——産業社会のフォークロア』(1951年)である。その後, コミュニケーションの問題を扱った雑誌『探究』の編集をしていたが, 次いで『グーテンベルグの銀河系——活字人間の形成』(1962年)を刊行, 更に『人間拡張の原理——メディアの理解』(1964年)を出すに至り, ようやく一般の注目を引き始める。1967年になってアメリカのマス・メディアが派手にマクルーハンを取り上げるようになり, アメリカでのマクルーハン・ブームを招来した。その影響はただちにヨーロッパ及び日本にも及び, マクルーハンは一躍, 世界的存在となった。しかしその名声はあくまでも「ブーム」であり, 日本でも数年のうちにかき消されてしまった。なお, ‘The Cool Revolution’, Reviewed by Neil Compton, Commentary, January 1965.を参照のこと。
 - 11) 日本では, 次のような著作がマクルーハン・ブームを引き起こす原因の一端を担ったと考えられる。——竹村健一『マクルーハンの世界——現代文明の本質とその未来像』講談社, 1967年。竹村『マクルーハンとその対話——日本文化とマクルーハニズム』講談社, 1968年。竹村『マクルーハン理論の展開と応用』講談社, 1968年。大前正臣編『マクルーハン・その人と理論』大光社, 1967年。大前『百万人のマクルーハン——ビジネスから家庭教育まで』徳間書店, 1968年。
 - 12) 例えば, B. H. バグディキヤンは, マクルーハンの予言したようには活字メディアはなくならず, 依然として強い力を持ち続ける, といった形の取り上げ方をしている。岡村黎明訳『インフォメーション・マシーン』サイマル出版会, 1973年。
 - 13) 後藤和彦は, マクルーハン・ブームが起こった1967年に, 次のように評している。——「たしかにアメリカのジャーナリズムはマクルーハンでにぎわっている」し, 「マクルーハンの発言のいくつかの断片は, 現代に金言としてすでに一部のアメリカ人のボキャブラリーに入っている。」しかしながら, 「日本とアメリカでのブームの共通の特色として, 専門の社会学者のまともな発言がほとんどみられないということがある。これは一つには正体がいまだに不明で, 学者として断定的な判定を下すことは差控えておこう, という態度が社会学者の側にあるからだろう。うっかりしたことをいってあとになってどうにも身動きがとれなくなってしまうのである。アメリカの書評をみても, 真正面からやって成功しているものはどうも見当らない。書評のサインはしながら, 書評の中身はすべてマクルーハンの発言の引用, というのはなれ業をやったのけた人もいる。」後藤和彦「マクルーハンの生んだ幻想=「ビジネスマンのバイブル」の正体は?」(『朝日ジャーナル』1967年10月8日) 9頁。
 - 14) リースマンは, 社会的性格の「伝統志向」型→「内部志向」型→「他人志向」型, という移り変わりを論じた。D. リースマン『孤独な群衆』加藤秀俊訳, みすず書房, 1964年。
 - 15) 加藤秀俊「情報社会の文明史的展望」(加藤『文化とコミュニケーション』思索社, 1977年), 209頁。
 - 16) 前掲書, 230頁, 参照。
 - 17) Marshall McLuhan, ‘Sight, Sound and the Fury’, in Bernard Rosenberg & David M. White (eds.), *Mass Culture : The Popular Arts in America*, Free Press, 1957, p.490. 渡辺武達訳「視覚・聴覚・情覚」(鶴見俊輔編『現代人の思想7・大衆の時代』平凡社, 1969年), 130頁。訳は筆者による。
 - 18) 平井正他『都市大衆文化の成立——現代文化の原型 一九二〇年代』有斐閣選書, 1983年, 15

- 頁-16頁, 参照。
- 19) K. マンハイム『マンハイム全集 5 変革期における人間と社会』樺俊雄監修, 杉之原寿一郎・長谷川善許訳, 潮出版社, 1976年, 13頁。
 - 20) 前掲書, 16頁。
 - 21) 前掲書, 19頁。
 - 22) 前掲書, 27頁-28頁。
 - 23) 前掲書, 28頁。
 - 24) Marshall McLuhan, op. cit., p.495. 邦訳, 137頁。訳は筆者による。
 - 25) Marshall McLuhan, *Understanding Media : The Extensions of Man*, McGraw-Hill, 1964, p.9. 後藤和彦・高儀進訳『人間拡張の原理——メディアの理解』竹内書店新社, 1979年, 16頁。
 - 26) Marshall McLuhan, *The Gutenberg Galaxy : The Making of Typographic Man*, University of Toronto Press, 1962, p.5.高儀進訳『グーテンベルクの銀河系』竹内書店, 1968年, 32頁。
 - 27) Ibid., p.7. 邦訳, 36頁。
 - 28) Marshall McLuhan, 'Sight, Sound, and the Fury', p.489.邦訳, 129頁。訳は筆者による。
 - 29) Marshall McLuhan, *Understanding Media : The Extensions of Man*, p.8. 邦訳, 15頁-16頁。
 - 30) Marshall McLuhan, *The Gutenberg Galaxy : The Making of Typographic Man*, p.2. 邦訳, 27頁。引用されている文章は次のとおりである。——「貨幣経済は、現物による経済に伴っていたものとは全く違った社会構造を招来した。……強調されねばならないのは、貨幣の使用という技術的事実よりは、貨幣の使用に伴う社会構造のこの変化である……」
 - 31) Marshall McLuhan, *Understanding Media : The Extensions of Man*, p.9. 邦訳, 16頁。
 - 32) Ibid., p.8. 邦訳, 15頁。なお、マクルーハンは、別の論文において、このような考え方を「メディア・アプローチと呼び、従来のアプローチを「情報理論的アプローチ」と呼んで区別している。彼によれば情報理論的アプローチは静力学に基づいており、「内容」概念によって知らず知らずに制限され、メディアの形態的分析が不十分であった。これに対し、メディア・アプローチは、「たとえば、発音に即した筆記及び印刷物は、それらがもう一つのメディア、すなわちスピーチを「含んでいる」という意味においてだけ、内容を持っている」という考え方をするのである。Marshall McLuhan, 'Effects of the Improvements of Communication Media', *The Journal of Economic History*, December 1960, No.4, p.572.
 - 33) Ibid., p.8. 邦訳, 15頁。なお、日本でも多田道太郎が、複製芸術に関して同様な見解を示している。彼はまず芸術の歴史をメディアの歴史として扱うとした上で、複製芸術を、旧芸術・既製芸術の模写・複製手段として発生したと考える。つまり、写真は絵の、映画は絵・演劇の、レコードやテープは音楽・語りものの複製手段であり、更に言えば、文学も、活字の発明以前（筆写の時代）は演劇と伝承の複製にすぎなかったし、また活字も文字も、声によるコミュニケーションの複製手段だったのである。多田道太郎『複製芸術論』勁草書房, 1962年, 3頁-13頁, 参照。
 - 34) Ibid., p.8. 邦訳, 15頁。
 - 35) 藤竹暁「疑似環境論の展開」(『新聞学評論』第30号, 1981年), 参照。藤竹は、マクルーハンの「メディアはメッセージ」を次のような文脈で引用している。——「文明批評家M.マクルーハン流に言えば、「メディアはメッセージである」。マス・コミュニケーションの手段、すなわちマス・メディアが人びとの全体を覆い包んでいることが日常的な前提となっており、さらにマス・メディアが不断に「共有世界」を提供し続けていることも、また日常的前提となっており、そのこと自体を、人びとがマスコミに接する際に改めて問い直し、吟味する必要を感じなくなってくると、マスコミで報道されたことは、信ずることのできるものであるとして行動する「習慣」が形成されることになる。また、マスコミで報道することだけが、人々の視野のすべてとなってしまう、不幸にして、マスコミ報道から抜け落ちてしまった「現実環境」の部分は、あたか

- も存在していないかのような錯覚にとらわれてしまう。」藤竹暁『事件の社会学』中公新書、1975年、48頁-49頁。
- 36) Marshall McLuhan, 'Myth and Mass Media', in Herry A. Murray (ed.), *Myth and Mythmaking*, Beacon press, 1960, p.288.
- 37) Ibid., p.289.
- 38) Marshall McLuhan, *Understanding Media : The Extensions of Man*, p.8. 邦訳, 15頁。
- 39) マクルーハンは、コミュニケーション史の公理として次のように述べている。——「もし人間のコミュニケーションの歴史に一つの公理があるとしたら、それはコミュニケーションの形式的手段におけるあらゆる革新は、社会変動の衝撃の上に、それに連続した衝撃を重ねる、ということなのである。」Marshall McLuhan, 'Sight, Sound, and the Fury', p.494. 邦訳, 135頁。訳は筆者による。
- 40) K. マンハイム, 前掲書, 14頁。
- 41) Marshall McLuhan, *Understanding Media : The Extensions of Man*, p.7. 邦訳, 14頁。また、彼は次のようにも主張している。——「あらゆるメディアはわれわれ自身の身体と感覚の拡張であり、われわれは日常の経験においていつも一つの感覚を他の感覚に移しかえているのであるから、われわれの感覚が拡張されたもの、すなわちもろもろのテクノロジーが、ある形態から他の形態へ転移し同化する過程を繰り返しているとしても驚くことはない。」Marshall McLuhan, *Understanding Media : The Extensions of Man*, p.116. 邦訳, 146頁-147頁。
- 42) Charles H. Cooley, 'The Significance of Communication', in Bernard Berelson & Morris Jonowitz (eds.), *Reader in Public Opinion and Communication*, enlarged edition, The Free Press of Glencoe, 1953, p.145. 大橋幸・菊池美代志訳『社会組織論』青木書店, 1970年, 56頁。訳は筆者による。
- 43) Ibid., pp.146-147. 邦訳, 58頁-59頁。訳は筆者による。
- 44) Marshall McLuhan, op. cit., p.7. 邦訳, 14頁。彼は更に、次のようにも指摘している。——「話すことであれ、書くことであれ、あるいはラジオであれ、ともかく道具を作る動物である人間は、これまでずっと、他のすべての感覚と機能を攪乱するようなやり方で、感覚器官のある部分を拡大してきた。だが、こうした「実験」をやりながら、人間はその実験を観察することを常になおざりにしてきた。」Marshall McLuhan, *The Gutenberg Galaxy : The Making of Typographic Man*, 邦訳, 29頁-30頁。
- 45) 三木清『技術哲学』岩波書店, 1942年, 7頁。
- 46) 前掲書, 12頁。
- 47) Marshall McLuhan, op. cit. 邦訳, 18頁-19頁。
- 48) Ibid., 18. 邦訳, 27頁-28頁。
- 49) Ibid., 18. 邦訳, 28頁。
- 50) Harold A. Innis, *Empire and Communications*, Tronto : University of Tronto Press, 1972. を参照のこと。
- 51) 「文化研究」については、拙稿「『批判的コミュニケーション研究』における「批判」の意味」(『慶應義塾大学新聞研究所年報』第29号, 1987年11月)及び拙稿'Reconsidering the understanding of the "cultural studies" in Japanese media studies'(『東海大学紀要 文学部』第59輯, 1993年9月)を参照のこと。
- 52) James W. Cary, 'Mass Communication Research and Cultural Studies : An American View', in James Curran, Michael Gurevitch and Janet Woolacott (eds.), *Mass Communication and Society*, The Open University Press, 1977, p.413.
- 53) エドワード・T・ホール『沈黙のことば』國弘正雄・長井善見・斉藤美津子訳, 南雲堂, 1983年, 9頁。

飯塚浩一

- 54) 「人類学者にとって、文化とは一個の人間集団の生き方、すなわちかれらが身につけた行動の型や態度や、物質的なものの全体を意味してきた。」前掲書、39頁。
- 55) 前掲書、13頁。
- 56) 前掲書、80頁。この箇所は、Marshall McLuhan, *The Gutenberg Galaxy : The Making of Typographic Man*, の邦訳31頁に引用されている。
- 57) ジョルジュ・フリードマン, 前掲書, 39頁-40頁。
- 58) Marshall McLuhan, *Understanding Media : The Extensions of Man*, p.18. 邦訳, 28頁。